学校だより「みんなと ともに」　― 校長のつぶやき ―

〈文責〉清明小学校 校長 岩 下　聡

その2

【校長のつぶやき】　その47　「一芸に秀でる」　（令和２年10月23日）

土曜日に、「博士ちゃん」という番組をやっている。サンドウィッチマンと芦田愛菜が出演している番組だが、ここに出てくる子どもたちがおもしろい。自分の好きなことを追究して、大人顔負けの知識を身につけている。例えば、「野菜」に“とことん詳しい”博士ちゃんだったり、「お城」に“とことん詳しい”博士ちゃんがいたりする。会津美里町に住む博士ちゃんは、「妖怪」に“とことん詳しくて”妖怪に関する本を5冊も自費出版したりしている。とにかく“とことん詳しい”のだ。

これまでの教育界は、「オールマイティ」な子どもを称賛してきた。通信票で言うと、「オール5」（小学校は「オール3」だが）を取るような子である。しかし、この変革期には、もしかすると「スペシャリティ」な子ども（大人）が求められているのかもしれない。

「一芸に秀でる」という言葉がある。何でもいいから、自分の好きなことに“とことん”こだわって“とことん”のめり込んでみる。すると、“ポン”と突き抜ける瞬間がくる。その体験は人生において、とても貴重である。「博士ちゃん」は「誰もが一芸に秀でることができるよ」「みんなで一芸に秀でてみようよ」というメッセージを私たちに発しているような気がしている。

【校長のつぶやき】　その48　「お迎えの車をどのように･･･」　（令和2年10月29日）

「清明フェスティバル」が終わって子どもたちが帰った後に、地域の方からお叱りの電話がありました。相手の方は、自らの名前を名乗った上で、「子どもを迎えに来ている車が5～6台並んでいたが、見通しがわるくなり危険なのではないか」「横断歩道から5m以内は駐停車禁止となっている。交通法規に触れる車があり、横断歩道をわたる子どもの安全が保たれていないのではないか」「相手の車を優先させ道を譲ったのに、感謝の意を示さないのは常識としてどうなのか」といったことを話されました。

その方のお話もよく分かりますし、お迎えにくる保護者の方の気持ちも分かります。本校の校地内に駐車できる十分なスペースがあれば、すぐに解決できることなのですが、現状はご存じのとおりです。悩ましいところですが、電話をくださった方の話に耳を傾けていただけると、幸いに思います。

【校長のつぶやき】　その49　「震災から まもなく10年」　（令和２年11月6日）

先週、県小学校長会の仕事で、県内外の先生方と「原発視察」に行ってきた。ここ3年間、毎年足を運んでいる。今回は、加えて「相双地区の校長との懇談」や「伝承館の見学」もあった。実際に行ってみると、「復興への道半ば」であることを実感する。多くの方の感想は「百聞は一見にしかず」であったが、私もこの目で見てきたことを書き記したいと考えた。

◇ 原発周囲の環境は、「変わったところ」と「変わらないところ」がある。

私の記憶では、初めてのときは、外を歩いている作業員は防護服を着ていたように思う。今回は、マスクはしていたが、服装は通常の作業服であった。原発の敷地内はバスによる移動なのだが、今回初めて1～4号機を望む高台でバスを降りた。記念写真を撮ったが、放射線量はどうだったのだろうか。

原発に向かう途中では、中間貯蔵施設の整備が進んでいた。高速道路や周辺道路にはダンプが目立つ。本校の汚染土もここに運ばれてきたのだろう。

富岡駅や双葉駅も整備され、全線開通した常磐線を電車が走っていた。反面、双葉町内の国道6号は、道路の両側が封鎖され、立ち入ることは未だできない。桜で有名な夜ノ森公園も、近づくことはできない状態であった。

◇ 「伝承館」が新たにでき、「語り部の話」や「フィールドワーク」も行われている。

震災を風化させないための施設として「伝承館」ができていた。映像資料も豊富で、あらためて「複合災害」に見まわれた本県の実情を確認した。実体験に基づく語り部の話や、フィールドワークとして実際に現地を見ながらの話は、より実感を伴って震災を感じることができた。特に、「請戸小の奇跡」と言われる津波から児童の命を守り切った教師たちの行動は、同じ教育者として大変勉強になった。

◇ 避難を強いられた地域の「学校」は、以前厳しい状況にある。

避難指示が解除されても、住民は戻るか戻らないかの選択を迫られている。学校は児童生徒数が激減したため、小学校と中学校を合わせた形の義務教育学校にする動きが見られている。飯舘村では、今年度から義務教育学校「いいたて希望の里学園」が開校している。

※ 再開した「Ｊヴィレッジ」は新たに宿泊棟が建てられていた。青々とした天然芝が印象的だった。

【校長のつぶやき】　その50　「＋α（プラス アルファ）の言葉」　（令和２年11月6日）

最近は、朝、校庭南側のイチョウの木の下の掃除をしている。昨年の「学校だより」にも書いたが、イチョウの実（銀杏）が落ち、子どもの通学を邪魔しているからだ。さて、掃除をしながら、子どもたちに「お

はよう」と声をかけているのだが、「おはようございます」の声とともに、「お掃除をしていただいて、ありがとうございます」と「＋αの言葉」を加えて応えてくれる子がいる。大変うれしい気持ちになり、ほうきを動かす私の動きも軽やかになる。
　掃除を終え、昇降口に来ると、検温担当の教師、養護教諭、協力員などが、勤務時間の前にも関わらず、子どもたちを迎えてくれている。そして、教務主任の早川教諭である。早川教諭は、４月から毎朝、昇降口にいて、子どもたちに声をかけている。「おはようございます。〇〇さん、きょうはいつもより早くていいね。」とか「〇〇さん、きのう休んだけれど大丈夫かな。元気になってよかったね。」とか、挨拶だけではなく「＋αの言葉」を子どもたちにかけている。おそらく、その言葉から“安心感”や“エネルギー”をもらっている子もいることだろう。
　何気ない朝の風景から、「＋αの言葉」の大切さを学んでいる今日この頃である。

【校長のつぶやき】　その５１　「交通事故の絶無を！」　（令和２年１１月１３日）

　悲しい話である。Ｔ君は、私が初めて担任をした子どもの一人である。３年、４年と担任をして一旦離れた後、卒業時の６年で再度担任をした。彼は、勉強も運動も得意で、ともにトップクラスであった。特設サッカー部では、センターフォワードを担っていた。しかし、中学１年生で、帰らぬ人となってしまった。
　それは、交通事故である。部活終わりの下校時、その日たまたま自転車のライトが切れていた彼は、後ろを走る友だちの自転車のライトに照らされ、家へと向かっていた。しかし、何かの拍子に互いのタイヤが接触し、彼はバランスをくずした。運のわるいことに、自動車がすぐ近くまで来ていた。即死である。親切心で後ろを走っていた子どもも、私の教え子である。
　この話には続きがある。その自動車を運転していたのは、実は私とも面識のある小学校教師のＨ先生であった。私はそれから数年、命日には自宅を訪ねて線香をあげていたのだが、家に上がるとＨ先生が必ず先客としてそこにいた。その日たまたまその場を通りかかってしまったＨ先生は、今も懺悔の日々を過ごしているのだろうか。
　交通事故は、被害者も加害者も不幸にする。「事故に気を付けて」「横断歩道では一旦止まって」「青信号になってもよく見て」など、後悔をしないためにも、子どもたちへの日々の声かけをしていきたい。そして、自らも十分に注意をして運転をしたい。まもなく彼の命日がくる。供養として、この話を載せてみた。

【校長のつぶやき】　その５２　「ささやかな実験」　（令和２年１１月２０日）

　いつもの年は土日の度に何か用事があったのだが、今年度はほぼ何もない。そこで、妻の実家に行くことが多くなった。とても自然が豊かで、道路脇にサルが群れていたり、イノシシが鼻で土を掘り起こした跡があったりする（ついでに大量の〇〇〇も）。クマもいるので、外作業をするときは内心ドキドキしている。
　さて、一本の「柿」の木が敷地内にある。毎年たくさんの実をつけるのだが、最近では誰も取る人はいない。ふと自分が取ってみようかと思ったが、問題は「渋柿」であることである。取りあえず、手の届く範囲の柿を取ってみた。
　家に持ち帰って、試しで「渋抜き」の作業をしてみた。高濃度の焼酎に浸した後、段ボールに入れて封をしておいた。２週間経ったころ不安の中で食べてみると、渋柿は甘くなっていた。実験は大成功である。「焼酎」の力で、「渋柿→（焼酎）→甘柿」となった。悲しいサガで、何か「子育て」の話に例えられないかとも思ったが、今回は皆さんにお任せすることにした。
　この前、「スイセン（２０球）」と「チューリップ（１００球）」の球根を庭に植えておいた。まもなく雪の下に埋もれてしまうが、雪解け後にはきれいな花を咲かせることだろう。今から楽しみである。

【校長のつぶやき】　その５３　「赤裸々な気持ち」　（令和3年１月１２日）

　２年前、本校職員による不祥事があった。体育館で説明会を行い、大勢の保護者の方の前に私は立った。説明が終わり、いくつかの質問を受けたが、その質問は的確なものであった。感情的に非を責めるような雰囲気はなかった。そのとき、私は、「本校の保護者はきちんと説明をすれば分かってくれる人たちだ。さすが清明小の保護者は違う。」と素直に思った。
　それから、新たな試みをいくつもしてきたが、それは、そのときの気持ちがいつも私の根底にあったからである。「本校の保護者は分かってくれる。」その気持ちは、今も変わっていない。
　しばらく「校長のつぶやき」を書いていなかったが（実は何も浮かばなかった…）、また、再開しようと思う。あくまで私の「自己開示」であるので、「校長は今そんなことを考えているのだな」と、笑いながら読んでいただけると幸いである。

【校長のつぶやき】　その５４　「転校生がいっぱい来るといいなあ・・・」　（令和3年１月１５日）

　先般、「３５人学級」の実現がニュースで話題になった。このコロナ禍を踏まえ「学級の人数を少なくすること」が大きな理由となっている。うれしい話なのだが、本校はその恩恵を受けることはできない。それは、「児童数」が３５人を超える学年がないからである。
　さらには、福島県は元々「少人数教育」に力を入れていたのだが（「少人数指導（１学級２担任）」か「少人数学級（２学級各１担任）」を選べる児童数がある）、次年度にその恩恵を受けることができるのは、「２

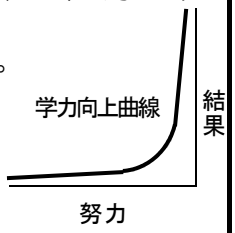
年生（現1年生）」のみとなる。（その2年生も3年生になると1学級となる。）
　このように「児童数」によって「学級数」が変動するのが「学校」である。（そして、「学級数」によって「教員数」も変わってくる。） この話は、現在把握している情報を基にしているので、「転校生がたくさん来て、うれしい誤算となるといいなあ。」と心の中で思っている。

【校長のつぶやき】　その55　「子どものため、とは」　（令和3年１月29日）

　初任校でのことである。ＰＴＡ会長の家は、学校から一番遠いところにあった。そのころは、保護者との飲み会がよくあったのだが、ある飲み会でたまたま席が隣になった。だいぶ酒も入ってきたころ、会長が私に言った。「先生、もうすぐ娘は卒業するけれど、学校に入ってから雨が降っても雪が降っても、一度も車で送っていったことはないんだ。学校まで遠くてかわいそうだと思うけれど、車で送っては娘のためにならないと思って、ぐっとがまんするんだ。」という話だった。「なるほど、そういう考え方もあるのだ」と、若かった自分には新鮮な驚きであったことを覚えている。
　翻って、自分はどうかというと、子どもが学生時代は完ぺきな“アッシー君”であった。「送って」と言われればホイホイと、言われなくてもホイホイと。さらには、子どもがつまずかないように、困りそうなことは先回りして手助けをしていた。子どもが成人した今も、笑われるような“あまい”親である。
　「何が子どものためか」は、人それぞれである。ただ大切なことは、「将来どんな状況にあろうとも、強くしなやかに自分の足で人生を歩くことのできる自立した大人に育てること」だと思っている。

【校長のつぶやき】　その56　「努力する才能」　（令和3年2月4日）

「“努力する才能”ってありますよね」と、ある担任がつぶやいた。「努力」が「才能」だという表現を聞いて、おもしろい表現だな、と感じた。でも、これは確かにあると思う。例えば、学力。「努力」をしても最初はほとんど効果が現れない。なかなか浮上しない。そこで諦めずに「努力」を続けると、あるとき「壁」を超えて急に「結果」として現れるようになる。そこまで根気強く続けることができるのは、やはり「才能」なのかもしれない。「うさぎとかめ」のお話の「かめ」には、その才能があった…ということになる。



【校長のつぶやき】　その57　「待つことの大切さ」　（令和3年2月１2日）

　毎朝、昇降口の前に立ったり、地域の中を歩いたりしている。「子どもたちの見本になろう」という気持ちもあるので、子どもの顔を見ると、先に「おはよう」と、あいさつをする。あいさつが返ってこなかったり、あいさつの声が小さかったりして、何となくガッカリすることもある。
　ちょっとイタズラな気持ちが湧いてきて、子どもが近づいてきても、先にあいさつをしないで待ってみた。子どもたちの距離感はバラバラで、遠くからあいさつのできる子もいるし、ぎりぎりまで来てから「おはようございます」と言う子もいる。ただ、概ねあいさつをしていることは分かった。
　そこで、ハタと思ったのだが、自分が先にあいさつをすることで、子どもが先にあいさつをするチャンスを奪っていたとも言えるのではないだろうか。校長のあいさつを受けてからあいさつを返すという歪んだ関係性が身に付いてしまったとも言えるのではないだろうか。このように思ってからは、あいさつをするのをグッとがまんして、子どもがあいさつをするのを“待つ”ようにしている。そして、子どもがあいさつをしてから、「先にあいさつをしていていいね」とか「遠くからあいさつができているね」とか、プラスのフィードバックをするようにしている。
　ほかにも似た場面はあるように思うのだが、子どもの成長にとって「待つこと」も必要なことだと再認識した。ただ「待つこと」は心理的に結構つらいことも痛感している。

【校長のつぶやき】　その58　「『小さな読者』からのエール」　（令和3年2月１9日）

「学校だより」を読んでくれている「小さな読者（3年生）」が書いた「作文（手紙）」が届きました。
　私の心が、ぱっと明るく元気になる内容だったので、紹介をさせてください。

「校長先生の みんなとともに」

　わたしは、清明だよりが配られると、お母さんやお父さんといっしょに話をします。
　なぜかというと、校長先生が作って下さる「みんなとともに」という清明だよりは、毎回学校の事を中心にいろいろな事が書いてあってすごいなと思うからです。
　学校に行くと、校長先生には会えるのですが、「みんなとともに」を読んでいると、校長先生がとても近くでお話ししてくれているような気持ちになって楽しいです。コロナウイルスの事もあって、なかなか自由に会えない人がいたり、今まで平気でできていた事もできなくなってしまったりしたけれど、いろいろな事がかいてある「みんなとともに」の清明だよりが、わたしは大すきです。
　また次の「みんなとともに」がわたされたら、校長先生のお気持ちを考えて、また読んで家族とお話しするのが楽しみです。

　私は校長になってから、毎週金曜日に「学校だより」を発行することを“習慣”にしてきました。何もネタが浮かばず、「今週はもうだめか」と思うこともしばしばですが、何とかここまで続けています。

「小さな読者」が楽しみにしているのならば、来年度末の退職の日まで、心ウキウキさせながら、“ネタさがし”をしていこうと思います。「小さな読者」からのエールを、しっかり受け止めました。

【校長のつぶやき】　その５９　「春ですね」　（令和３年２月２６日）

２月１８日（木）は、「欠席（出席停止、事故欠を含む）」が「０人」だった。今年度は、新型コロナウイルス感染症への対応で、体調不良は休んでいただくことを奨励しているので、「全員出席の日」は珍しい。「今年度初めてか」と思って調べてみたら、他に５日もあって驚いた。（５月２７日（水）　２８日（木）　２９日（金）　６月２５日（木）　７月３１日（金））２学期以降は、“久々”ということになる。

さて、今年度は７時半に昇降口を開け、子どもの体調確認をしてから校舎へ入れているのだが、最近になって外で待っている子の列の長さが長くなってきた。並んでいる子に聞いてみると、「学校に来たくて家で待ちきれない」とか「早く縄跳びの練習をしたい」とか、それぞれに理由があるようである。「学校が好きでたまらない」のは、うれしい限りである。春になり、子どもたちの気持ちも、全体的に“上昇気流”のようである。

【校長のつぶやき】　その６０　「チーム清明　その１」　（令和３年３月４日）

「チーム清明」という言葉はあまり使わなかったが、学校がチームとして営まれるのは、紛れもない事実である。この学校だよりでも、子どもたちを直接指導する「教員」にスポットライトが当たることが多いが、それを「支える仕事」をしてくれる職員がいることで、学校は成り立っている。

本校で事務の仕事をしているのは、齋藤雅子副主査である。先日のＰＴＡ会計監査では、質問に明確に答えるとともに、その正確な事務処理を認めていただいた。また、会計の「見える化」に努め、その時点での処理済みの金額と残金を、常に明らかにしてくれている。さらには、課題意識を持ち、毎年「新たなやり方」に挑戦している。“スーパー事務職員”であり、担任にとっても“心強い存在”である。

学校を運営するためには、「今あるもの」を有効に活用することが大切である。そして、「事を成す」ためには「お金」は大事である。税金から、また保護者の皆様から預かったお金を、子どもたちのために有効に活用したい。本校のチームの一員に優秀な事務職員がいることは、皆にとって（特に私にとって）幸せなことである。

【校長のつぶやき】　その６１　「チーム清明　その２」　（令和３年３月１２日）

前回、本校の教育活動を支えている職員の話を書いたが、今回はその続きである。本校には、福島県で雇用している職員と、福島市で雇用している職員がいる。「支える仕事」をしている職員は、市で雇用している職員が多い。（本校に勤務している職員は、みんな子どもたちにとっての「先生」である。）

用務職の大江先生は、勤務時間前にまずゴミ出しをしてくれている。その後は、季節に応じて外作業をすることが多い。落ち葉の片づけは大変な作業である。市役所への文書送達も大切な仕事である。

調理員の町田先生と佐久間先生は、男性二人でチームワークよく、給食をつくってくれている。余裕をもってつくりたいと時間前に出勤して作業を開始している。調理が進むと、校舎内においしい匂いが漂ってくる。

会計年度任用職員で本校に籍があるのは、特別支援教育協力員の富田先生、ハートサポート相談員の力丸先生、学校図書館司書の庄司先生である。それぞれに子どもに直接かかわる仕事をしてくれている。スクールサポートスタッフの元木先生は、県の雇用で、消毒作業を中心に支援をしてくれて、とても助かっている。

そして、佐々木教頭先生である。「本校がうまくいっている」のは、児童、保護者、職員の話に耳を傾け共感的に対応してくれている佐々木教頭先生の力によるところが大きい。正に、「縁の下の力持ち」である。

【校長のつぶやき】　その６２　「チーム清明　その３」　（令和３年３月１９日）

では、「チームのメンバーは学校の職員だけなのか」という話である。「子どもの成長」には、学校と家庭が連携して教育にあたることが大切である。「学校の教育方針」と「家庭の教育方針」の擦り合わせである。同一歩調で教育に当たることができれば、「鬼に金棒」である。そして、「地域の支え」も必要である。

そして、何よりも大切なことは、チームの中心に「子ども（本人）」がいることである。「あなたは、どうしたいの？」「あなたは、どうなりたいの？」“子どもの思い”があって、はじめて「みんなの方向性」が決まる。次年度も「一枚岩」となって、最高の「チーム清明」でありたいと思う。「みんなの笑顔」のために。